

4. 設備基本方針の検討と設定

1) サイン整備

①基本設計における課題と整備方針（案）

本業務では、遊歩道での案内サインについての検討を行う。

城内での来訪者の遊歩道としては「史跡めぐりコース」や「登山道」が利用されているが、パンフレット等の地図がないとルートがわかりにくい状況である。また、史跡地が広大であるので現在地が認識しづらく、災害発生時の場所特定がしづらくなっている。

遊歩道は主要な遺構をつなぐルートとしての機能は果たしているが、目的地への方向、探訪距離の把握がしづらくなっている。

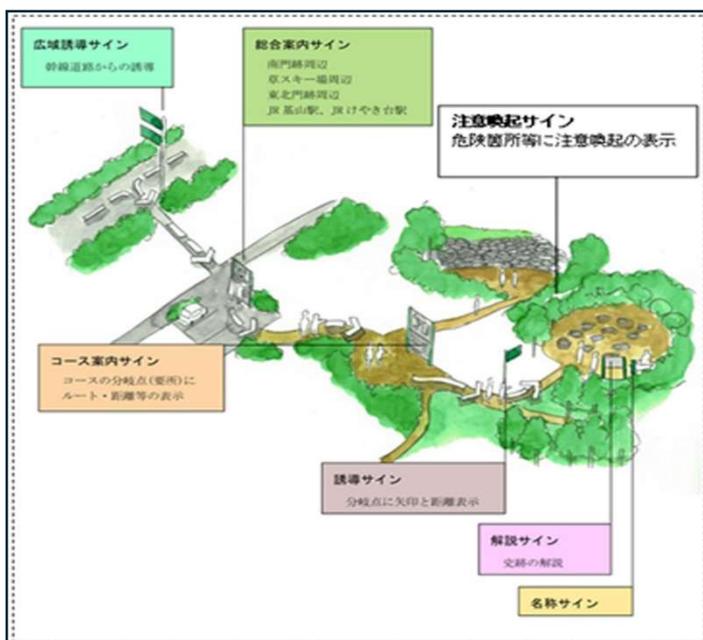
既存遊歩道の調査、ボランティア団体との視察を行いサインが必要と思われる箇所の検討を行った。その時のサイン位置検討資料は巻末資料を参照。

サイン整備について整備方針（案）を以下の表 19 に示す。

表 19. サイン整備におけるにおける現状と課題、課題に対する整備方針表

	現状と課題	課題に対する整備方針（案）
サイン	総合案内、解説サイン、道標の不足やボランティア団体による手製の道標が乱立しており統一感がない	総合案内、解説サイン、道標等のサイン類型を整理し、デザインの統一等を図りながら設置を行う
	散策距離の把握ができるサインがない	目的地までの距離表示や現在地の表示など内容の検討を行う
	基肄城跡に生息する植物解説サインがなく絶滅危惧種など貴重な植物があることが伝わりにくい	植物解説サインの設置、情報発信を行う
	樹名板がなく山中の樹木などが分からない	樹名板などの設置を行い、植物に親しんでもらう
	礎石群の名称のない箇所があり、解説や情報発信が出来ていない	礎石群の名称の整理を行い、解説板の設置、情報発信を行う
	地形が急峻で自然環境が高い立地にあり、整備を行う上での資材搬入等が困難な場所がある	軽量素材等による素材の選定を行い現場に適合した施工計画が必要

	遺構保全に係る要素
	遺構の価値を補完する要素
	基肄城跡の活用を向上させる要素
	その他



②サイン類型

サイン類型については、基本計画で以下の図の様に示されており、この類型に従って整備を行う。

図 94. サインシステムイメージ図

(※基本画より加筆)

②各サインの定義

各サインにおける主な設置位置、内容等の基本的な考え方は以下のように整理を行う。具体的な設置位置は、図 98 (87 頁) を参照。

実施設計の際には、設置場所に応じて表示内容の組み合わせ等の詳細検討を行う。

表 20. 拠点区分とサイン

主な設置場所	類型	主な表示内容
大拠点	総合案内サイン	基肆城跡全体の案内
中拠点	コース案内サイン	コース案内 (ルート、距離など)
小拠点	解説・名称サイン	各遺構の解説、名称
散策コースの分岐点など	誘導サイン	方向、施設名、分岐番号、距離
危険箇所など	注意喚起サイン	注意喚起
視点場	解説サイン	視点場の解説など

③デザイン

基山町では、歴史のまち案内サイン整備事業等により本町の歴史的風致に関わる建造物などへの誘導のためにサインの設置を行っている。また現地には日本遺産のサインも設置されている。このことからサイン類はそれらの事業とデザインの調和を図りながら検討を行う。

歴史のまち案内サイン整備事業等におけるサイン整備状況写真



①サイン整備状況(パネルタイプ)



②サイン整備状況(矢羽タイプ)

「令和3年度(第1回)基山町歴史まちづくり推進協議会会議録 資料1」より

図 95. 歴史的風致維持向上計画関係事業によるサイン意匠

日本遺産サイン



図 96. 日本遺産関係サイン意匠

④材質

地形が急峻で自然環境が高い立地にあり、整備を行う上で資材搬入が困難なため、軽量で、耐久性のあるアルミ材が望ましいと考えられる。(表 21 参照)

⑤基礎形状

サイン設置箇所については、遺構の確認調査が必要である。

そのため、調査結果を踏まえた基礎形状の選定が必要となるが、整備を行う上で資材搬入が困難なため、現段階では人力での運搬、施工可能なスクリータイプや打込み杭タイプが望ましいと考えられる。

スクリータイプは設置後、砂や石がスクリーに噛み合い固定されるため来訪者がサインを回すことは困難であり誘導サインの矢印の向きが変更されるなどのいたずらの懸念もない。また打込み杭タイプも地面との摩擦により構造物を支持するため、施工後に来訪者がサインを回すことは困難である。

サイン板面の大きさによっては、スクリータイプや杭打ち込みタイプは支持力が足りず、使用できないためコンクリート基礎など、場所によって使い分ける必要がある。

具体的には、総合案内・コース案内サインは基本的にコンクリート基礎を必要とする。誘導・解説・名称・注意喚起サインは、基本的にスクリータイプや杭打ち込みタイプが使用可能である。

サインを設置する際には、主要遺構から離して設置を行う等の配慮が必要である。(表 22 参照)

⑥デジタルコンテンツの活用

サインの内容として、基山山頂部のドローン空撮による映像や基肆城跡の詳細な GIS データ等、これらを AR や VR に活用する方法も検討を行う。

特に誘導、解説サインについては、多言語表示や現在地の確認等を行うために必要不可欠であるが、山

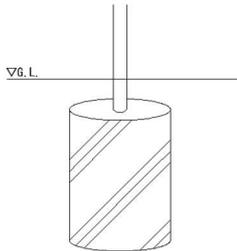
中に運搬可能なサイン板面サイズ等に限りがある為、板面表示のみで全てを網羅することは難しい。

表 21. サイン材質比較表

	案A		案B		案C	
	アルミ材		リサイクルウッド		石	
イメージ						
自然景観性	落ち着いた塗装にすれば景観との馴染みは悪くない	△	木材風で景観との馴染みも悪くない	○	自然素材で景観に馴染みやすい	○
耐久性	耐候性、耐食性に優れる	○	木材とプラスチックを混合しているため腐食しにくく、木材より耐候性に優れる	△	石材なので、耐候性が高く経年変化が少ない	○
登山道における運搬性	材質が軽く登山道での運搬にも適している	○	石材よりは軽量だが登山道での運搬にはあまり適さない	△	材料が重く登山道での運搬が不可能	×
メンテナンス性 (日常的な補修)	特に日常的なメンテナンスの必要性はない	○	特に日常的なメンテナンスの必要性はない	○	特に日常的なメンテナンスの必要性はない	○
経済性	アルミニウムを押出成形	○	廃木材と廃プラスチックを配合して押出成形	△	自然素材を加工	×
評価	景観との馴染みも良く耐久性に優れ、軽量で登山道の運搬に最も適している	○	景観との馴染みも良く耐久性に優れるが、登山道の運搬にはあまり適さない	△	景観との馴染みも良く耐久性に優れるが、登山道の運搬が不可能	×

※一般的な推奨順位に関わらず山中における整備のため、現地状況に合わせた選定が必要となる

表 22. 基礎形状比較表

		案A		案B		案C	
		スクリュー・打込み杭型		コンクリート基礎型		石材置き型（基礎なし）	
イメージ							
遺構への影響		最小限の掘削で施工時の影響範囲が少ない	△	大きな掘削を伴うため、施工時の影響範囲が大きい	×	掘削を伴わないので施工時の影響はない	○
施工性		地面に垂直に打ち込むだけで施工がしやすい	○	大きな掘削を伴うため、山中の施工に不向き	△	施工自体は容易だが、山中への運搬が不可能	×
登山道における運搬性		材質が軽く登山道での運搬にも適している	○	材料が重く登山道での運搬が困難	△	本体重量に影響を受け、重く登山道での運搬が不可能	×
対応 別 基礎	総合案内	使用不可	×	使用可能	○	使用不可	△
	コース案内	使用不可	×	使用可能	○	使用不可	△
	誘導	使用可能	○	使用可能	○	使用可能	○
	解説	使用可能	○	使用可能	○	使用可能	○
	名称	使用可能	○	使用可能	○	使用可能	○
	注意喚起	使用可能	○	使用可能	○	使用可能	○
評価		施工時の影響範囲が少なく、施工性も良いで、運搬性も優れる	○	施工時の影響範囲が大きく、山中での施工性もあまり良くない 運搬性もあまり良くない	△	施工時の影響範囲、施工性は良いが、山中の運搬が不可能	△

※前提条件としてサイン設置の主要遺構から離れた場所に設置する事を基本とする

※推一般的な奨順位に関わらず山中における整備のため、現地状況に合わせた選定が必要となる

したがって以下の機能を持った QR サインの表示を行うことで、山中での多言語表示や現在地の確認を行う手法の検討も行う必要がある。

a. インストールの不要

アプリストアからのダウンロード・インストール・利用者登録が必要なく QR コードを読み取るだけで、Web サイトを見るようにすぐ利用できる。

b. オフライン対応

基本機能の利用に常時通信は必要とせず、通信環境の整備された場所で QR コードを読み取っておけば、好きなときに情報へアクセスできる。

c. GPS 連動

通信環境の整備された場所で読み取った基本機能と GPS 連動を行うことで、現在地をリアルタイムに確認できる「GPS 連動マップ」として持ち歩くことができる。またサインと連動も行う。

d. 多言語表示

多言語表示（英語、中国語（簡体字、繁体字）韓国語、日本語）は、端末の標準設定言語※に自動で切り替えを行う。「特別史跡基肄城跡」の表記は日本遺産仕様（National Special Historic Site Site of Kii-jo Mountain Fortress）とする。

※ 言語が非対応の場合は英語で表示。



図 97. オフラインサインシステムイメージ

これらのコンテンツは、通信環境に左右されるが、山頂地区や南門跡地区等の通陳環境の整備された場所で登山者のスマートフォン等に取り込めば、オフラインでの解説や位置情報等のコンテンツが山中でも使用可能となるシステムであるが、通信環境は不確定な要素である為、特に位置情報の確認については、道標に番号を表示し、全体図に示したり、道標間に道しるべとなるようなミニ道標の設置の検討も必要である。

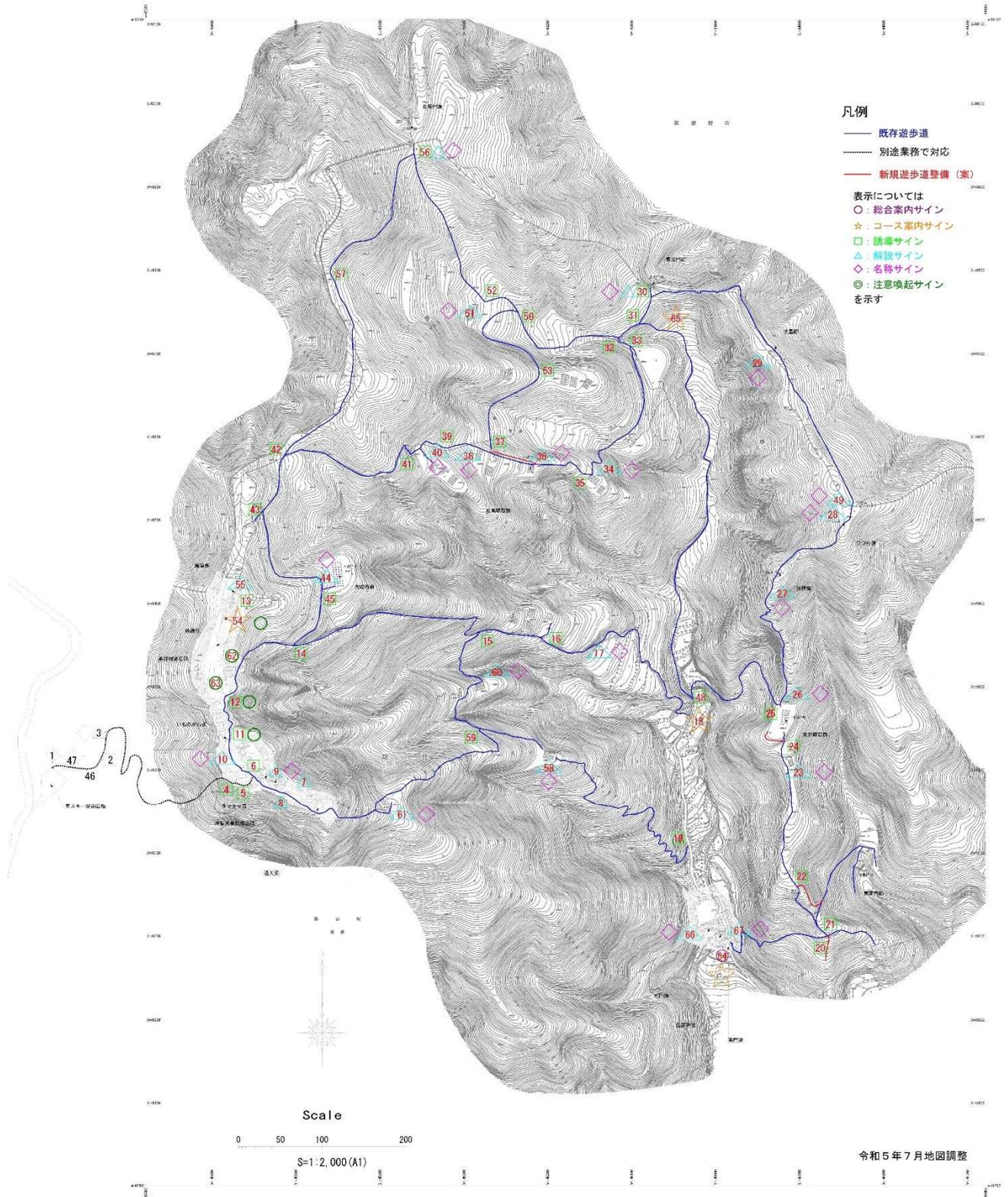


図 98. サイン設置計画図

2) 管理・便益施設整備

主な管理・便益施設について以下の比較表より検討を行う。

①柵

基肄城跡における危険箇所には、柵を設けるが、周囲の景観との調和を図るためにはロープ柵が最もなじみが良いと考えられる。

またコンクリート基礎を必要としないと事からも遺跡保護の観点において効果的である。

表 23. 柵比較表

	案A	案B	案C
	ロープ	スチール	PC擬木
イメージ			
自然景観性	簡易的な形状のため、風景の視認性を阻害せず景観との馴染みも良い ○	塗装次第で景観との馴染みも悪くないが、風景の視認性に影響を与える ×	木材風で景観との馴染みも悪くないが、風景の視認性に影響を与える △
耐久性	劣化の進行が他の材料と比べて速い △	耐候性、耐食性に優れる ○	耐候性、耐食性に優れる ○
登山道における運搬性	材質が軽く登山道での運搬にも適している ○	PC擬木よりは軽量だが登山道での運搬にはあまり適さない △	材料が重く登山道での運搬に不向き ×
メンテナンス性 (日常的な補修)	簡易的な作りのため部材交換等のメンテナンスが容易 ○	二次製品のため部分的な破損の場合は部材を丸ごと取り換える必要がある ×	二次製品のため部分的な破損の場合は部材を丸ごと取り換える必要がある ×
評価	風景の視認性を阻害せず景観との馴染みも良く、運搬性、メンテナンス性も優れる ○	塗装次第で景観との馴染みも悪くないが、風景の視認性に影響を与え、登山道の運搬にはあまり適さない △	景観との馴染みも悪くないが、風景の視認性に影響を与え、登山道の運搬が不向き ×

※一般的な推奨順位に関わらず山中における整備のため、現地状況に合わせた選定が必要となる

②ベンチ

ベンチについて資材搬入が難しい山中では、既存木を加工した木製ベンチの設置が望ましい。基山山頂や南門跡など比較的、資材搬入が容易な場所については、耐久性、経済性より合成樹脂製のベンチが望ましい。

表 24. ベンチ比較表

	案A		案B		案C	
	木材		合成樹脂		石	
イメージ						
自然景観性	自然素材で景観に馴染みやすい	○	木材風で景観との馴染みも悪くない	○	自然素材で景観に馴染みやすい	○
耐久性	劣化の進行が他の材料と比べて速い	△	木材とプラスチックを混合しているため腐食しにくく、木材より耐候性に優れる	○	石材なので、耐候性が高く経年変化が少ない	○
登山道における運搬性	他の材料に比べると軽量で登山道の運搬は容易	○	石材よりは軽量だが登山道での運搬にはあまり適さない	△	材料が重く登山道での運搬が不可能	×
メンテナンス性 (日常的な補修)	現地材を使用することで材料の調達、交換が容易	○	二次製品のため部分的な破損の場合は部材を丸ごと取り換える必要がある	△	特に日常的なメンテナンスの必要性はない	○
評価	耐久性に劣るが、現地材を使用することで植栽管理にもつながり、自然素材で景観との馴染みが良い	○	景観との馴染みも良く耐久性に優れるが、登山道の運搬にはあまり適さない	△	景観との馴染みも良く耐久性に優れるが、登山道の運搬が不可能	×

※一般的な推奨順位に関わらず山中における整備のため、現地状況に合わせた選定が必要となる

③トイレ

現在、基肄城跡には、草スキー場前広場と水門・南門跡前の広場にトイレが設置されている。これらは基肄城跡の南側に位置しているため、北側にトイレがなく散策途中にトイレを使用するには、一旦、下山する必要があり不便である。

水門・南門跡から東北門跡付近までは、管理道路が整備されており、管理道路の北側終着点（東北門跡付近）はスペースがあり、トイレの設置が可能である。そのため遊歩道整備と合わせてトイレ整備を行う。実施設計の際に詳細な検討が必要だが、管理道路入口の幅などが狭く工事の際は4t車程度での運搬となると考えられる。そのため、現時点では、運搬可能なサイズの製品か現地で組立が可能な製品が望ましいと考えられる。

また、山中には上下水道の整備が整っていないため、トイレは自然エネルギーを活用した循環式トイレが望ましい。以上を踏まえると、比較表より常設型のRC型が望ましいと考えられる。

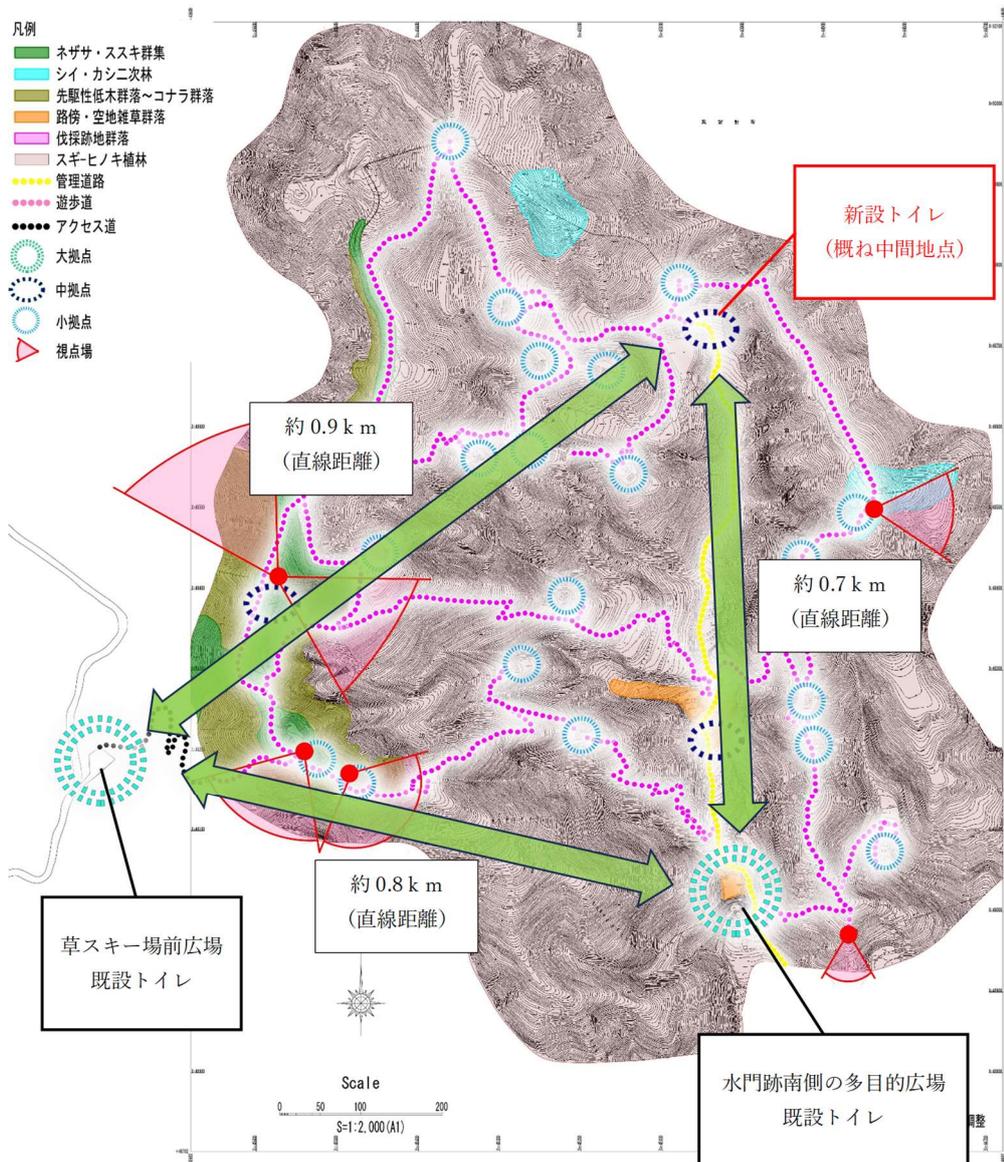


図 99. トイレ設定図

表 25. 循環型トイレ比較表

	案A		案B		案C	
	RC造二次製品（常設型）		木造（常設型）		コンテナ型（移動可）	
イメージ						
デザイン性	塗装色の組み合わせで様々なパターンに対応可能でデザイン性が高い	○	木材の素材感を押し出したデザイン	△	コンテナなのでデザイン性に乏しい	×
耐久性	RC造なので耐候性、耐久性に優れている	○	木材なので、山中や川の近くなどでは、腐朽の進行が速い	△	コンテナなので、いたずら等による凹みが懸念される	△
現地における運搬性	二次製品なので分解し、現地の管理道を通行可能	○	資材搬入は現地の管理道を通行可能	○	分解が出来ないため現地の管理道の通行が難しい可能性がある	×
施工性	ユニット製品で施工性が良く、仕上がりも綺麗	△	一から建設する必要があり、施工性は良くない	×	コンテナ型なので置くだけで良い	○
トイレ室数	男子：1室 女子：1室	○	男子：1室 女子：1室	○	男子：1室 女子：1室	○
評価	耐候性、耐久性に優れ、ユニット製品で施工性が良く、仕上がりも綺麗でコストパフォーマンスが高い	○	木材なので、山中や川の近くなどでは、腐朽の進行が速い 一から建設する必要があり、施工性は良くない	△	コンテナなので運搬、施工性に優れるが、現地の管理道の幅が狭く、通行が難しい可能性がある	×

※一般的な推奨順位に関わらず山中における整備のため、現地状況に合わせた選定が必要となる。

ア. 浄化処理

浄化処理は、1. し尿を細かく粉砕、2. 生分解（微生物処理）と膜処理によるろ過、3. オゾン処理とUV処理水を除菌・消臭、4. 活性炭フィルターで水をきれいにする。以上のサイクルで処理を行う。処理できなかった余剰排水はタンクへ排出し、定期的にくみ取りを行う。



図 100. 浄化処理の概要図

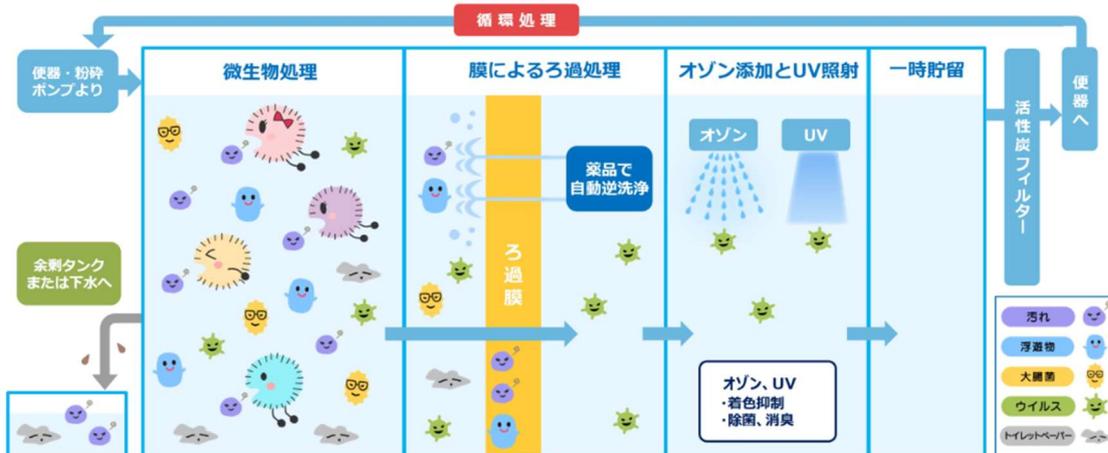


図 101. 浄化処理の仕組み図

イ. 電気設備

電気設備は、1. 商用電源 AC100V、2. 再生可能エネルギー（太陽光発電）、3. 蓄電池（最大3日間（72時間）※50回/日の場合）、4. 発電機（定格出力：2.0kVA以上、電圧：AC100V、方式：正弦波インバータ方式（推奨））により動作を行う。

運用の安定性では、商用電源による運用が最も安定するが、現在、山中のため電源が供給されていない。今後も電源の供給が無い場合は、再生可能エネルギー（太陽光発電）による運用が考えられる。

また災害復旧事業に伴い管理道路の復旧が行われることから復旧工事と合わせ建柱や地下埋設に電気設備の供給整備も検討していく必要がある。



図 102. 電気設備の概要図

ウ. 給水設備

現地は、山中のため給水設備が整っていない。近くに川があるが、雑用水として使用するには水質検査が必要である。また、井戸の掘削を行い井水の利用も考えられるが、史跡地のため掘削を行うには、慎重に検討を行う必要がある。以上を踏まえると貯水タンクによる給水が望ましいと考えられる。

5. 維持管理基本方針の検討と設定

1) 基肄城跡全体の維持管理方針

これからの基肄城跡全体の維持管理を町役場だけで行っていくことは困難である。

また基山町内においても基肄城跡の保存活用を支援していく団体活動の動きが見られ、これらの団体との連携や町民とともに基肄城跡の保存活用に取り組むことが望まれている。住民や関係団体との連携、関係行政間の連携による広域的な取り組みが今後益々重要性を増してくることから、それぞれのコミュニケーション形成、支援体制等を行う必要がある

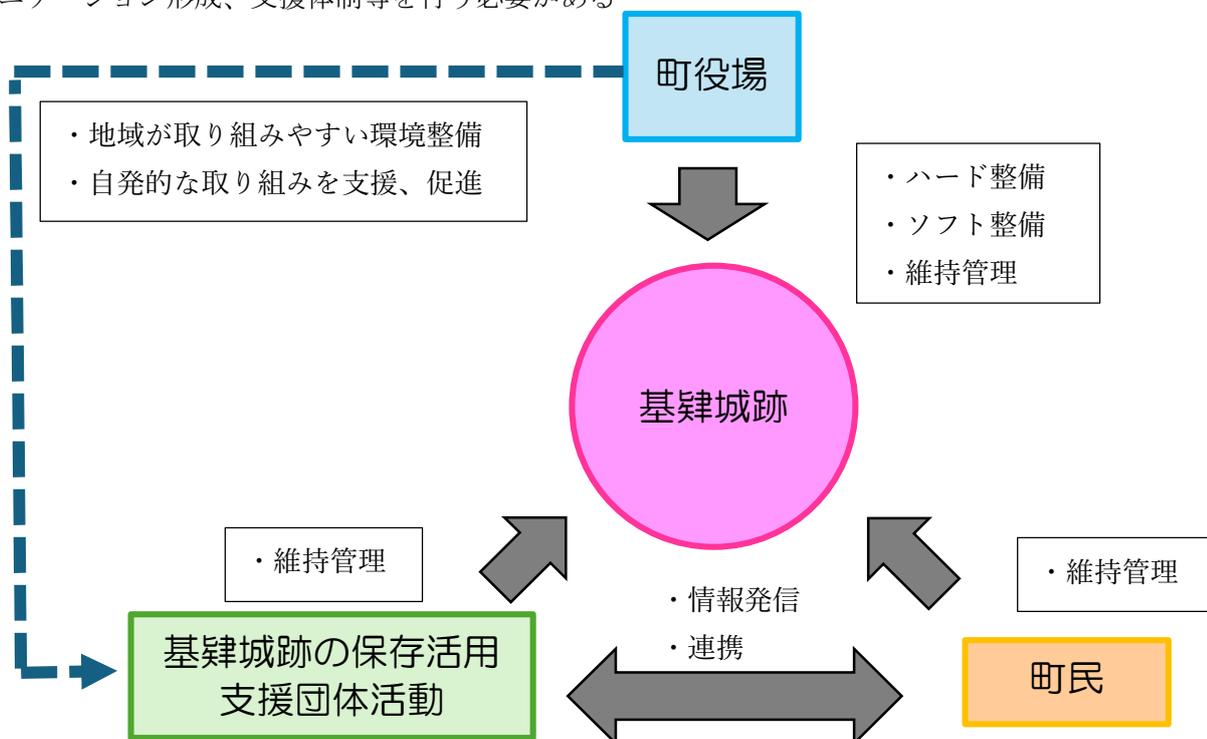


図 103. 維持管理方針図

2) 植栽維持管理基本方針

植栽維持管理については、以下に示す植生区分ごとに維持管理を行う。

a. スギ-ヒノキ植林（人工林）

土塁や石塁、礎石、遊歩道沿いの支障木を間伐し、史跡と生態系保全の両立を図る。間伐後は広葉樹を植樹して林相転換を行う。

b. 先駆性低木群落～コナラ群落（低木林）

視点場付近の支障木を間伐・剪定して眺望や土塁、通路などの視認性を確保する。

c. ネザサ-ススキ群集（草原）

景観と植生維持のため現状の草刈りを継続するとともに地域住民と連携し、野焼き再開を含めた草原維持・拡大を行うことも視野に入れながら慎重に検討を行う。

d. シイ-カシ二次林（シイ林）

視点場付近の樹木を間伐・剪定して眺望や視認性を確保する。

e. 路傍・空地雑草群落（草地）

定期的な草刈りやつる切りによって史跡の景観を維持する。

f. 伐採跡地群落（伐採跡地）

定期的な草刈りやつる切りによって史跡の景観を維持するが、樹木を適度に残して草刈りの頻度を軽減する。

3) 遊歩道維持管理基本方針

遊歩道において、補修、保全については、軽微な段階ですみやかに補修を行うことが遺構保全の観点からも望ましく、そのためには、日常的な点検補修を行う必要がある。

しかし、遊歩道の総延長は6.0km以上もあり、急峻な地形であることから町役場だけでは維持が困難である。このため、ボランティアや登山客などと協力体制をとりながら維持管理体制を構築することが重要である。そのための補修、保全技術の普及には、わかりやすい技術マニュアル・作業マニュアルや作業手順を学ぶ事ができる技術講習会等の場を定期的に設けて簡易な日常的な修繕はボランティアや登山客で行い、本格的な手入れが必要なものは町役場が行うなど役割分担や情報共有の方法も検討する必要がある。

第6章 全体基本設計図の作成

1. 整備イメージパース

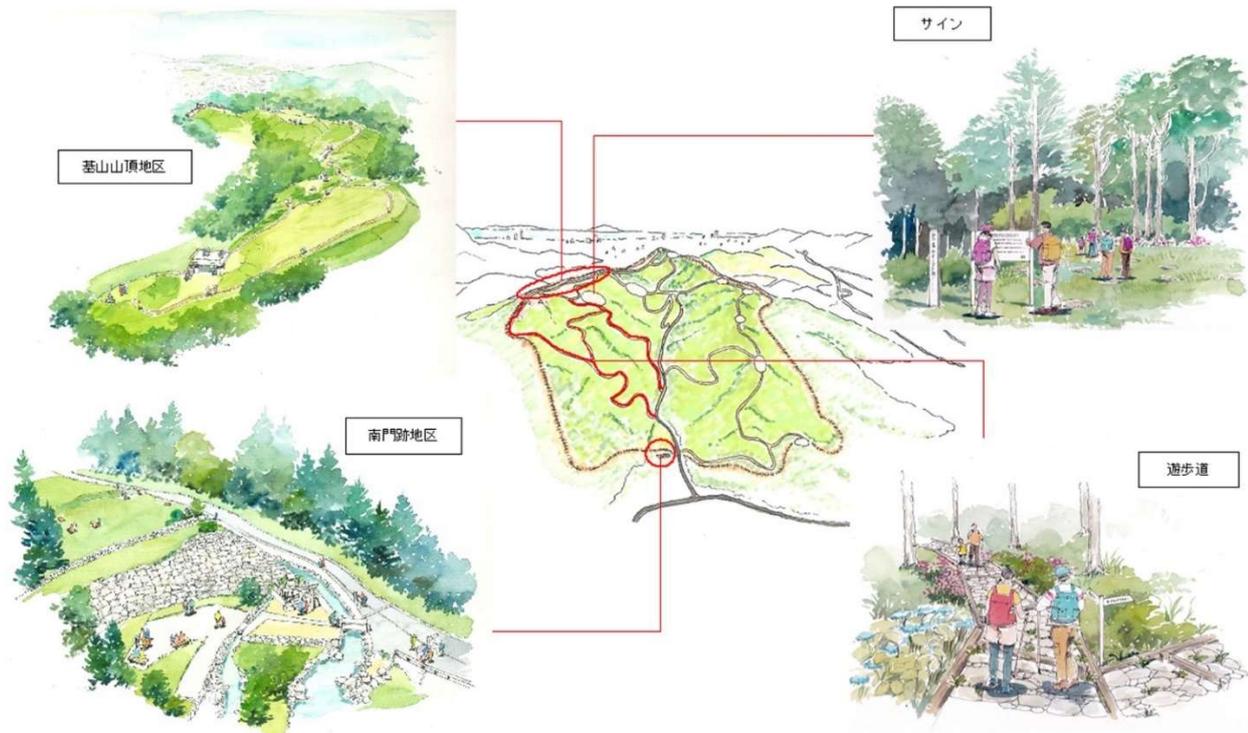


図 104. 対象区域整備イメージパース

●基山山頂地区



図 105. 基山山頂地区整備イメージパース

●南門跡地区



図 106. 南門地区整備イメージパース

●サイン



図 107. サイン整備イメージパース

●遊歩道



図 108. 遊歩道整備イメージパース

2. 基本設計図【別紙資料参照】

- ①基山山頂地区
- ②南門跡地区
- ③これらを結ぶ遊歩道

第7章 事業経費及び事業スケジュールの検討

これまでの基肄城跡の史跡の確認調査では、一部トレンチ調査は行っているが、遺構の全体的な解明はできていない状態である。史跡が広大で、遺構が点在していることから、長期にわたる発掘調査期間と膨大な費用や適切な体制整備などが必要となるため、史跡の確認調査については、段階的に毎年度継続して調査を行う予定である。

以上のことから実施設計の際に史跡の確認調査の結果を踏まえた詳細検討を行う必要がある。

また、基肄城跡の整備にあたっては古代山城の特性上、資材搬入等が困難である。そのため、施設の材質や工法の選定に注意する必要がある。

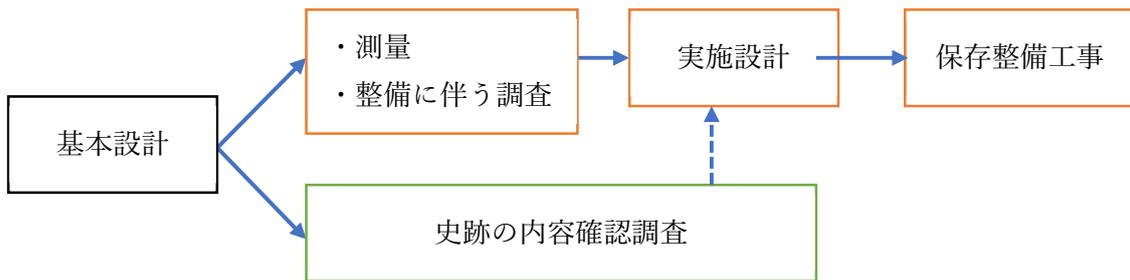


図 109. 保存整備工程フロー図

前期計画-1 について、事業スケジュールを以下に示す。

表 26. 事業スケジュール

			前期計画-1					備考
ゾーン	地区	項目	R5	R6	R7	R8	R9	
エントランスゾーン	南門跡地区 (管理道路東側法面は後期計画)	基本設計						
		整備に伴う調査						
		測量						
		実施設計						
		保存整備工事						
眺望ゾーン	基山 山頂地区	基本設計						
		整備に伴う調査						
		測量						
		実施設計						
		保存整備工事						
全体	遊歩道① サイン①	基本設計						
		整備に伴う調査						
		測量						
		実施設計						
		保存整備工事						
	遊歩道② サイン②	基本設計						
		整備に伴う調査						
		測量						
		実施設計						
		保存整備工事						
保存整備委員会								

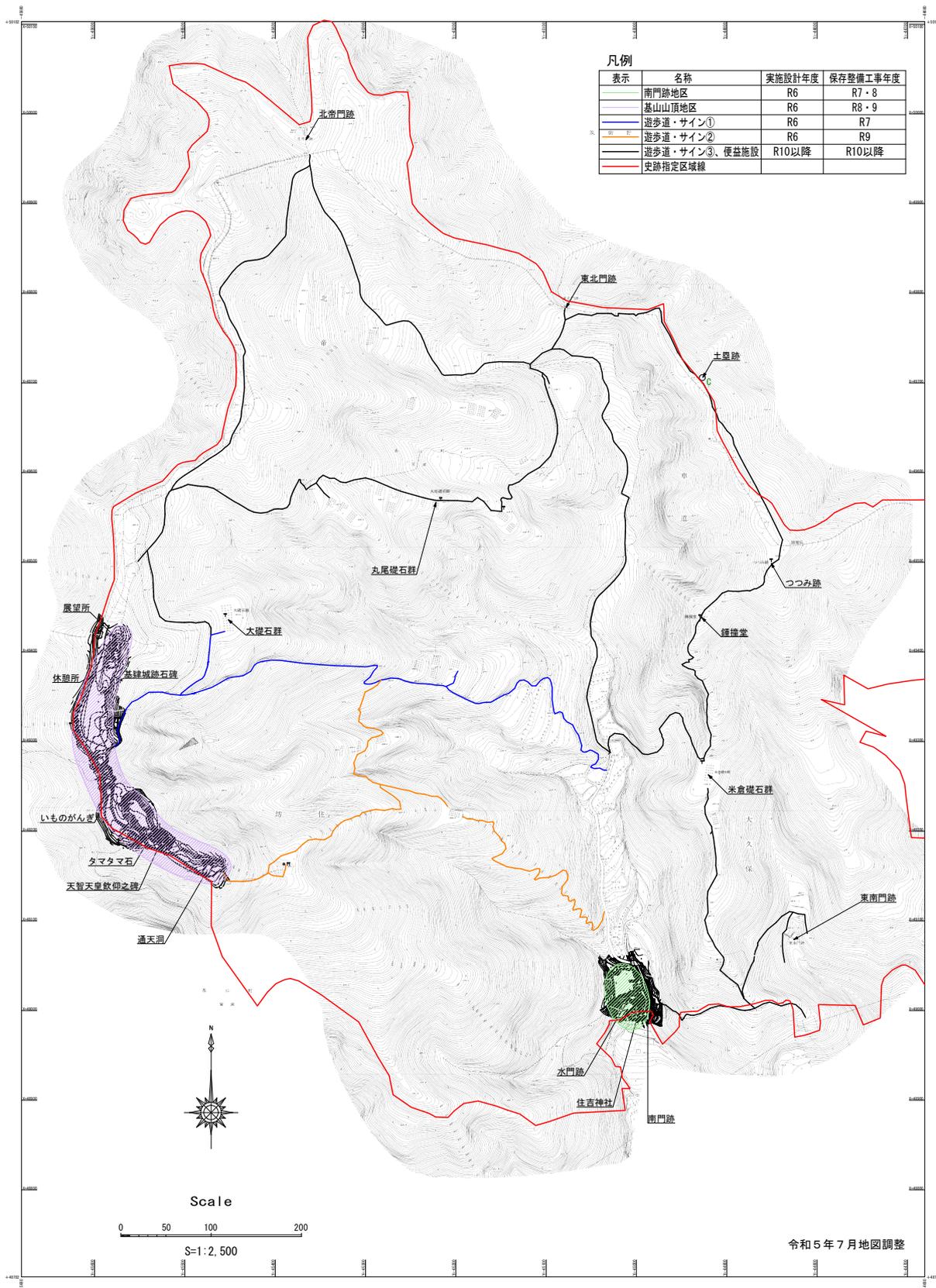


図 110. 事業計画図

第8章 委員会等への対応

1. 策定体制

計画の策定にあたっては、「基肄城跡保存整備委員会」を設置し、計画策定のための調整機関として基肄城跡に関わる関係自治体協議のための「基肄城跡連絡調整会議」を設ける。委員会に先立ち、基肄城跡連絡調整会議で計画内容等についての調整・確認を行うと共に、文化庁記念物課の指導・助言を踏まえて「基肄城跡保存整備委員会」での審議をもとに計画策定を行う。

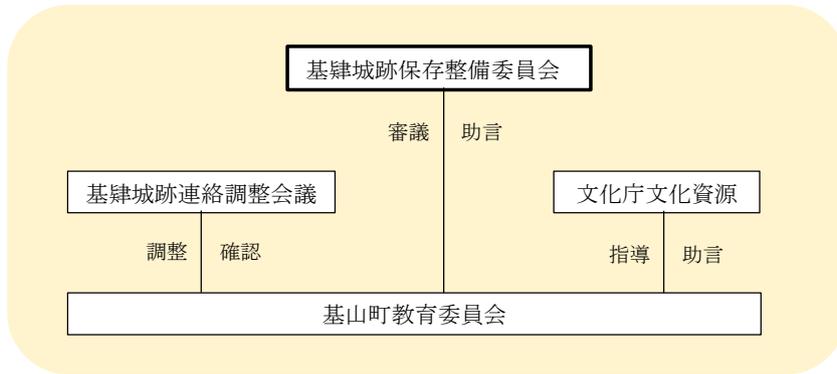


図 111. 委員会の位置付けと関係

○基肄城跡保存整備委員会委員名簿

	氏名	専門	役職等
委員長	杉本 正美	緑地計画学	九州芸術工科大学名誉教授
副委員長	坂上 康俊	歴史学	九州大学大学院人文科学研究院教授
委員	末次 大輔	土木工学	宮崎大学教授
委員	重藤 輝行	考古学	佐賀大学芸術地域デザイン学部教授
委員	久保山 正和	地元有識者	基山町文化財保護審議会会長
委員	園木 春義	地元有識者	基山の歴史と文化を語り継ぐ会会長

○基肄城跡連絡調整会議

佐賀県文化財保護・活用室 福岡県文化財保護課 九州歴史資料館 筑紫野市文化財課

○指導機関

文化庁文化資源活用課

○事務局

基山町教育委員会教育学習課

2. 委員会審議経過

全2回の基肄城跡保存整備委員会を開催し、指導・助言を頂きながら計画の策定を行った。また、委員会の前に基肄城跡連絡調整会議を行った。会議資料、議事録については巻末資料参照。

■委員会等

日程	議題
第1回 基肄城跡連絡調整会議 令和5年10月10日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・基肄城跡の現状と課題の整理等 ・基肄城跡災害復旧事業
第11回 基肄城跡保存整備委員会 令和5年10月24日(月)	<ul style="list-style-type: none"> ・基肄城跡の現状と課題の整理等 ・基肄城跡災害復旧事業
第2回 基肄城跡連絡調整会議 令和6年1月11日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・基肄城跡保存整備の方針と計画 ・基肄城跡災害復旧事業
第12回 基肄城跡保存整備委員会 令和6年1月18日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・現地視察 ・基肄城跡保存整備の方針と計画



【第11回委員会】



【第12回委員会】

第9章 今後の課題

特別史跡基肄城跡の保存整備は、前期計画を概ね10年を想定しており、それ以降を後期計画、将来計画と位置づけている。本設計は前期計画-1を対象としており、今後の整備計画実施に向けては、長期にわたる発掘調査・研究、関連する事業との調整、関連機関との協議、市民との連携強化、自然災害への備えなどの対応が多岐にわたることが想定される。

このような状況を踏まえて、基肄城跡の特徴である「見張る」「守る」「営む」「繋ぐ」機能を体感できる整備計画の具体化及び事業推進を確実なものとするために必要な課題を以下のように整理した。

1. 継続的な発掘調査・研究に向けた課題

基肄城跡は、基山山頂から谷を挟んで東峰までの広大な範囲を約3.9kmの城壁で囲まれた大規模な古代の山城跡であり、基山町教育委員会などによって発掘調査が行われてきた。

しかし、調査が完了しているのはごく一部であることから、今後保存整備を実施していく上で必要な礎石跡や門跡、土塁・石塁など重要な遺構の情報が不足しているのが現状である。

このため、大野城跡など関連する古代山城の先事例を踏まえつつ、基肄城跡の全容解明に向けて、これまで進められてこなかった現状把握を前提に計画を立案し、基肄城跡保存整備委員会や文化庁などの

指導・助言を得ながら、発掘調査に留まらず関係する諸分野の調査・研究を継続することが重要である。

2. 保存整備に関する課題

基肄城跡の北側は、筑紫野市と境界を接しており、北御門跡や東北門跡、土塁などの重要な遺構や遊歩道の一部が筑紫野市側にも連続して存在している。今後の視点場の確保に伴う樹木整理や遊歩道、門跡・土塁の保存整備においては、筑紫野市との連携が重要となることから、境界を明らかにしつつ、基肄城跡連絡調整会議などで情報を共有しながら、長期的な展望のもとで計画的に進めていく必要がある。

また、広大な山城の全体像を一度に理解させることは困難なため、今後の保存整備にあたっては、わかりやすい動線確保や視点場からの眺望や土塁の視認性が重要となるが、物理的に困難な場所もあるため、AR (Augmented Reality)・VR (Virtual Reality) などの先端技術やDEM (Digital Elevation Model) データと位置情報がわかるGIS (Geographic Information System) 機能を活用した解説展示を積極的に取り入れていくことが重要となる。

3. 植生管理に関する課題

史跡地内の植生は、歴史的風致の維持向上に係る重要な要素であり、適切な維持管理が史跡全体の保全にも大きく影響する存在である。

基肄城跡山頂部の草原は、希少な草本植物が生育する環境であるが、長年継続してきた火入れの中止などの影響による希少植物の減少や草原の縮小など危機的な状況にある。このような状況を回避するためには、植生調査に基づく草原の管理計画を早急に検討する必要がある。春・夏・秋に植生調査を行い、出現種のリストアップと希少種の分布を把握した上で、確認した希少種の生活史(フェノロジー)に基づく発芽～開花～結実のサイクルにあわせた草刈りを実行する必要がある。また、阿蘇や平尾台、秋吉台などの事例を参考にして基山の環境や人的資源に適合した管理体制も併せて検討することが重要となる。

史跡地内の大部分を占める人工林については、遊歩道整備と並行して間伐することになるが、保安林として県に許可申請をした上で計画的に作業を進める必要がある。人工林については、伐採後の搬出や土留めなどの現地利用や残置の方法も併せて検討が必要となる。

4. 管理運営や公開活用に関する課題

基肄城跡は高低差のある地形で自然災害の影響も受けやすく、遊歩道や法面、水路、木道などの損傷に伴い遺構面が棄損する可能性が高い。しかし、現地は車両が入れない急斜面地が多いことや特別史跡地内であることから大規模な土木工事は実施できない。このため分解して運べるものや軽量なもの、現地で調達できるものなど素材や工法は限定されるが、施設の状態を維持するためには定期的な点検と補修が必要となる。

史跡の施設や植生を町役場だけで維持していくのは難しいため、市民やボランティア団体参加による管理運営や公開活用の体制づくりを検討する必要がある。基山に関連して「基肄山歩会」「基山の歴史と文化を語り継ぐ会」「基肄かたろう会」「基山オキナグサ保存会」など多くの活動団体があり、定期的な意見交換会や講習会などを行いながら、持続可能な管理体制を模索する必要がある。

また史跡周辺の草スキー場やキャンプ場などの観光施設や九州自然歩道との管理運営や公開活用に関する連携も併せて検討していく必要がある。

表 27. 今後の課題要約表

課題項目	今後の課題
1 調査・研究	<p>基肆城跡は大規模な古代の山城跡で、その全体像の解明はまだ初期段階にある。</p> <p>現在の調査は一部分に過ぎず、重要な遺構の情報が不足している。そのため、基肆城跡の調査・研究は、まずは現状把握を前提とし、先行調査ならびに研究事例を参考にしつつ、調査研究のための計画を立案し、専門家ならびに文化庁・佐賀県など関係機関の指導と助言を得て進めることが重要である。</p>
2 保存整備	<p>基肆城跡の北側は筑紫野市と接しており、重要な遺構や遊歩道が筑紫野市側にも存在する。保存整備を進めるためには、筑紫野市との連携と情報共有が重要である。また、広大な山城の全体像を理解するのは困難なため、視認性を確保するための動線や視点場の整備が重要となる。</p>
3 植生管理	<p>基肆城跡の植生は、歴史的風致の維持と史跡全体の保全に重要な役割を果たしている。特に山頂部の草原は希少な草本植物の生育環境であり、その保全が求められている。そのためには、季節ごとの植生調査とそれに基づく管理計画の策定が必要である。また、史跡地内の大部分を占める人工林の適切な管理も重要で、遊歩道整備と並行して間伐を行い、伐採後の処理方法も検討する必要がある。</p> <p>これらの活動は、地域の環境や人的資源に適合した形で進める必要がある。</p>
4 管理運営・公開活用	<p>基肆城跡は自然災害の影響を受けやすい地形にあり、施設の維持には定期的な点検と補修が必要である。しかし、大規模な工事は困難で、軽量かつ現地で調達可能な素材や工法が求められる。</p> <p>また町役場だけでなく市民やボランティア団体の参加による管理体制の構築が重要となる。さらに、史跡周辺の観光施設や九州自然歩道との管理運営や公開活用に関する連携も併せて検討していく必要がある。</p> <p>電子機器による史跡解説が当たり前となりつつある現在、広大な山城の全体像を理解するのは困難な面を解消するために、基肆城内の電波環境の改善を前提としつつ、AR・VR や GIS を活用した解説展示が必要となる。</p>

第 10 章 基本設計に伴う測量業務 (別冊参照)

巻末資料 (別紙参照)